谷川雁の反定型音響
-「工作者」のダイナミズムについて-

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2021-05-28
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 羅, 皓名
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/21815

2020 年度　明治大学教養デザイン研究科博士学位論文要旨

谷川雁の反定型音響―「工作者」のダイナミズムについて―

The Anti-Form of Sound in Tanigawa Gan: On the Dynamism of “Operator”

教養デザイン専攻
羅　皓名

一、 モチーフとアプローチ

本稿は日本新左翼の思想及び運動に大きな影響を与えた詩人思想家・谷川雁（1923-1995）のテクストにおける論理構造と思想脈絡を解読することによって、その思想のダイナミックなモチーフを解明し、そのことを通じて、谷川の思想における「音響的」思考論理の存在を検証するものである。この検証を行った上で、その思想の定型を拒否する接合の論理をほかの時空における思索と連結させる契機を導き出す。

谷川は、「連帯を求めて孤立を恐れず」という東大安田講堂事件の際に内壁に書かれた名言の原作者であり、九州を根拠地として前近代的共同体に回帰するといった土着的思想傾向を帯びる大正行動隊の組織者であり、メタファーが文体に充満する詩人であり、またカリスマ性の強い反アカデミズムの思想家として知られている。しかし一方で、1960 年代後半に大正行動隊を離れて以後、彼が東京の言語教育企業・テックに入社し、経営者側の一員として労働組合と労働争議を繰り広げ、組合員を弾圧したことで、左翼運動に対する「変節」者と見做される面もある。晩年は、テックの職務を離れ、宮沢賢治（1896-1933）の童話を軸に、児童表現活動としての「人体交響劇」へと力を注ぎ始める。

このように、谷川の「難解」さは彼の前期、後期行動の断裂、思想体系における不定形の遊撃戦的特徴、メタファーに満ちる文体、そして彼のカリスマ性によって構成されてしまい、その「難解」さはロマン化、伝説化される陥穽を招く。この難点を避け、テックの労働争議において組合側のリーダーとして谷川と闘争を繰り広げ、核心的な谷川雁批判を展開した、ジャズ評論家・政治運動者の平岡正明は谷川について、「かなり音響的な詩人である――であった」、「俺の知るかぎりで、ジャズについてはあまり知らぬようだが、しかしもっともするどくジャズを理解した人物は谷川雁である」、というような評価をつけることによって、谷川の思想に接近するための「音響的」なアプローチを提示した。

歴史的分析の視角から谷川の行動の軌跡を描き、政治思想のスペクトルに谷川の思想を位置づけるなど、「谷川雁」を歴史や政治思想の座標系における一つの「現象」と見做す様々の優れた先行研究は少なくない。むろんこれも重要であろうが、異なった文化体系や歴史背景によって生ずる問題意識から谷川を取り扱おうとする本稿が問いたいのは、谷川の思想と行動が、長い年月をかけて討論され、実践され、また批評されてきた現在、どのように改めてそこに時間と空間上の「越境」の可能性を見つけ出し、新しい行動と「連帯」させ得るかという問題である。そこで、谷川の行動の軌跡研究より、その思想における論理の方が本稿の関心になる。

この関心がベースとなり、詩人・評論家の中森美方が指摘した「意味より意図と方法論」という、谷川の思想における論理の原型――「モチーフ」（動機）――を探す視点は、平岡に提示されたアプローチと結びついて、文字と音響の混合物としての文体である「詩」を解体し、音響の次元において谷川の思想の核心のモチーフに接近しようとする本稿の研究アプローチを導き出した。

平岡の言う「ジャズ」とは音楽のジャンルより、むしろ一種の思考方式である。それは、被抑圧大衆の連帯による音響として、支配的文化と「鋭く緊張し、接点で相互に変質したり溶解しあったりしながら成長しつづけている」、というダイナミズムを持つ不定型的な知性だと思われる。このような相互変質する関係性に基づく考え方こそが、知識人と大衆、そして理論と実感の間に「はさまれる」ところで、「異質のものを自分のうちにくわえこみ」ながら、「相手にも自分を消化させるためにおしつけ、自分の異質の肉をたべさせ」る、という谷川の思考の核心に据わる「工作者」のモチーフであり、または言葉の複数的可能性に依拠するメタファーに満ちる文体を構成するモチーフであるのではないか、と私は考えている。この論点を論証するために、本稿では谷川自身のテクストの探究に、そしてその思想の遡源と比較によって論を展開していく。

二、 構成及び各章の要約

本稿は二部構成、計五章により論を展開する。以下、各章の概要を記す。

第一部では、谷川の思想の内部におけるダイナミズムを取り出す作業を行い、その思想における「音響的」思考論理の存在を検証した。物事の内部におけるヴァイブレーションを感知できる、聴診器のようなコンタクトマイク（接触型マイク）を谷川の思想自体に装着することによって、その思想が帯びるダイナミズム＝音響を集音するような研究法で展開した内容であるため、その第一部を振動（vibration）と名づける。

第一章「『原詩』という音源へ向かう」では、谷川の「音源」となる二重性を持つ大衆像を解明し、谷川の「工作者」という双頭怪獣のような行動者のダイナミック性＝音響性を、立体的大衆像に連動する面から取り扱った。スターリン批判または毛沢東思想の影響を受け、「東京へゆくな」と唱え、辺境を根拠とする反中央性による谷川の思想のアカデミズム批判は知性に対する全面否定という「非」知性というより、むしろ逆方向から新しい知性の創造に向けられた「反」知性であるということを、本稿での解読によって明らかにした。そして、柳田國男に提起された「常民」の概念を先鋭化させる方法として、谷川は焦点を「無所属」の「異端の民」へ当て、「民衆の意識の底部」に思想や行動の発生源である「原点」が存在すると唱える。この設定により、分裂している知識人と大衆、両者はともに内部においてまた各々分裂していて、多層かつ立体的な存在となり、このような存在の様相こそが両者の食い合いを可能にさせ、そこから谷川の思想における音響（＝ダイナミズム）が生じ、その音響（＝ダイナミズム）は生活語と組織語、散文と詩、詩と原詩などの論題、または「工作者」という方法論における振子のような論理の間での往復運動として現れると、本稿の分析を通じて導出する。

第二章「内的リズムと工作者のモチーフ：『日本の歌』を中心に」では、谷川が 60 年安保闘争の後に書いた「日本の歌」という短文を中心に、その中に書き記された音響的ヒント――「今日的な段階の基調となっている音響」と「内的リズム」――を軸として、ドゥルーズとガタリが『千のプラトー』において論じた「リゾーム」や、「リズム」と「拍子」の相違、リトルネロによる「脱領土化」などの概念を使いながら、谷川の思想を音響論的に解読できるルートを検証した。「工作者」という、彼の中心概念をリゾームと見なすことによって、本章は、「テーマよりモチーフへ」と遡ることで、谷川の思想を解読する音響的方法が存在することを明らかにした。この議論を踏まえて谷川の「日本の歌」における「歌」を改めてみると、以下の論に至った。「歌」は狭義の可聴的音響現象に限ったものではなく、むしろ不可聴的音響――一種の思想方式、一種の

認識論である。「歌」の創出によって、疎外と闘う戦闘方法は、民衆というエネルギー場における「原詩」を震源とする音響の展延である。すなわち、時代基調の変遷に応じるところの、「内的リズム」の絶えざる止揚と創出は、思想の持続的創造でもある。谷川の革命は、「アンポ・ハンタイ・アンポ・ハンタイ」の硬直化した拍子に対し、新たな内的リズムを提出するための音響的創造行動を目指していたと言える。

そして第二部においては、第一部で聴き取ってきた音響をより広いフィールドにおいて、時間的縦軸と思想類型の横軸における参照点となる別の思想に反射させることによって、谷川の思想の音響性の様相を究明し、その音響を定位する作業を行った。異なる思想の間の相互作用に注目するため、その第二部を干渉（interference）と呼ぶ。

第三章「工作者の導音：日高六郎と谷川雁」では、谷川の東大時代の教員である日高六郎の早期思想を分析することによって、日高と谷川の思想的継承や相互影響関係を解明し、日高の思想は谷川の「工作者」の「先導音」であることを明らかにした。日高は戦前から精神の作戦としてベルグソン研究を始めたが、その「閉じたもの」と「開いたもの」における「開放」の二重性（＝両義性）を説くことにより示した動的な思考論理、そして戦後の研究において、「完成より可能性を」というベルグソンの思考傾向から引き継いだ人間の根源的可能性を信じるオプティミズムにおいて、谷川と繋がる思想的特徴を本章によって検証した。また、アンガージュマン（engagement）に対する日高と谷川の戦略の相違により、谷川の振子のような「未見の領域」に突入する「双面的なラディカリズム」をより明白に理解し、さらにそれとベルグソンに共通するモチーフを示す資料を提供した。それに加えて、日高が「知識人の位置について」において書いた「考える冒険者」を産み出す「海のざわめき」という音響的描写により、谷川の言う「原点」へ向かう「工作者」の母型の音が聴き取れる。以上のことを踏まえて、異質のものの衝突によって得られる混血性を知性の源と見做す傾向が、日高と谷川の思想において共通していることを明らかにした。

第四章「『主旋律』と『低音』の間に挟まれる工作者」では、丸山眞男と谷川が代表する思想方式の差異を考察することにより、前者における調和するシンフォニーの盲点と非音響性を論証し、谷川の「工作者」が帯びる音響（＝ダイナミズム）の様相を明白にした。本章の論証は、まず「理論信仰」と「実感信仰」という丸山が提出した図式を反射装置にして、谷川の思想における「理論―実感」についての認識論の複数性的特徴を反射された形で掴もうとする定位と測量の作業から始まった。次に、1958 年から 1959 年にかけて、谷川、日高と藤田省三により展開された「工作者論争」を枠に、「工作者」における論理と「反」論理という二つの焦点の相互干渉により形成されてくる「渦」を引き出し、「複数の表現形式における飛躍」、「『負の前衛』の必要」、「正／負工作者」、そして「工作者の分裂必至」の四点を通じて「工作者」の論理構造を導出する。そして藤田の工作者批判とそれに対する谷川と日高の反駁を手がかりにして「工作者」のダイナミズムを解明した。最後に、丸山が指摘した「執拗低音」説を反射装置として、谷川の思想における連続的音響の律動を反射された形で解像し、丸山に批判された「つぎつぎになりゆくいきほひ」という生成的低音音型の、第三世界と繋がる「土着性」を論証した。

以上の論を踏まえ、終章では本稿のモチーフの脈絡の補遺を加えて、これからの音響と遊撃戦を共鳴させるための終止符を打った。